

地元不安、一時中断

中日 田原市の学校統廃合計画

二〇二四年度までに田原市内の小中学校をほぼ半減させる市の「学校全体配置計画」。一四年に公表した当時は、少子化を踏まえて小規模校の回避を旨とする大膽な学校再編計画として脚光を浴びたが、現在は小休止状態に。統合先や統合時期を定めるだけ早く見直す方針だ。一時中断の背景には、地域の核となる学校を失うことに対する地元合意の難しさなどが浮かぶ。

(角野峻也)



閉校記念式典に続く「思い出を語る会」で校歌を斉唱する旧野田中の生徒やOBら＝田原市の旧野田中

■27校→15校に

計画では市内の小中学校を二十から十一に、中学校を七から四にする。

市教委は一三年四月、多くの級友と共に過ごせる環境で社会性を育むため、小中学校の児童・生徒数を一校あたり「百二十人以上が適正」とする指針を公表。統合先と大まかな統合時期を計画に明記した。

ただ現状は、中学校を四校に集約するものが立ったが、小学校は三校が統合した伊良湖岬小以外は手つかずのまま。花井隆教育長は「百二十人以上が望ましいが、数字ありきで

田原市の学校統廃合 学校全体配置計画に基づき、津波浸水想定区域にあった旧堀切小と旧和地、旧伊良湖小が統合し、2015年4月に伊良湖岬小が誕生。16年4月には旧野田中が田原中に統合された。19年4月には伊良湖岬中が福江中に、21年4月には泉中が赤羽根中に統合されることも決まっている。現状では市内の全18小学校で複式学校はないが、うち1校は今年で1クラス1人体制の試算では20年度以降、亀山小で複式学校になる可能性がある。

はない。地元で伝統や文化を学び、その地に根付く人との触れ合いも教育上大事」と説明する。

計画が進まない背景には、地元の複雑な思いがある。既に閉校した旧野田中の場合、部活動はバレーボール、フリスバンドなど五つのみ。統合先の田原中では十一の部から選べることから、地元でも早期の統合を求める声が上がった。

一方、小学校では、学校の遠くなり登下校に時間がかかる点や、母校小でも、スクールバスなどの運行費に新たな年間三千四百万円がかかる「旧三校の維持費より高い」（花井教育長）。教職員の雇用も継続するため、人員費抑制に直接結びつけない。

「将来的に統合が避けられない部分があるのも事実だが、しりとりを残さないことが重要」と花井教育長。出る、過疎化につながるのではないかと懸念する。

学生を養い、将来の入学見込予定者や複式学級になる可能性がある。かなとを地区役員らに伝えた上で、計画を検討する考えを示す。

統合によるスケールメリットはあるが、小規模校にも少人数教育

人口減少社会に突入した今、子どもの数が減った地域での教育環境をどう整えるか。決して田原市だけの問題ではない。

現場から

市は今後二十年で公

を實現し、一人一人が輝けるといった利点が

人口減少社会に突入した今、子どもの数が減った地域での教育環境をどう整えるか。決して田原市だけの問題ではない。